

# 福井健太サクソフォンリサイタル

ピアノ：細田真子

## 1部

ラブソディー .....ドビュッシー

アルトサクソフォンと11の楽器のための  
室内小協奏曲 .....イベール

プレリュード、カデンツァとフィナーレ  
.....デザンクロ

## 2部

ユニコ エチュード .....平野義久

滲んだ雪 .....平野義久

ウエスト67番通りの邂逅 .....平野義久

ソナタ .....フィル・ウッズ

浜松出身の  
演奏家シリーズ X

## 2003 四季コンサート 20周年記念

2003年5月25日(日) 6:45PM

会場：浜松市教育文化会館

主催：浜松音楽友の会

### プロフィール

#### 福井健太 (サクソフォン)

1978年、浜松市で生まれる。市立積志中学校時代、吹奏楽部に所属しサクソフォンと出会う。県立浜松西高校在学中には、静岡県高校文化連盟から特別表彰。東京芸術大学卒業。須川展也、二宮和弘、富岡和夫の各氏に師事。

浜松国際管楽器アカデミー&フェスティバルで室内楽とソロで新人演奏会に出演。ピアノ(細田真子)とのデュオユニット「UNIQDOX」を結成し、リサイタルを中心にジャンルにこだわらないコンサートやライブ活動を国内外で展開中。特に香港での演奏活動は様々なメディアに取り上げられた。N.Y.A.Soundsレーベルからこのユニットを含むCDアルバム「薔薇の奇蹟」をリリース。セカンドアルバム「25時の音楽」はメインゲストとして参加。「アルディーサクソフォンカルテット」のバリトン奏者としてマイスターミュージックからCD「FOUR COLORS」、「AIR」をリリース。

最近ではTV番組の挿入曲、TVコマーシャルの録音、N響、東京佼成ウィンドオーケストラなどの出演、マンハッタン・トランスファーをはじめポップスバンドのツアーサポートなどにも積極的に取り組んでいる。

#### 細田真子 (ピアノ)

愛媛県出身。東京芸術大学卒業。東京都在住。矢部民、故安川加壽子、浜口奈々各氏に師事。1999年フランス、エコールブリテンに参加しP.Devononに師事。

第40回全国学生音楽コンクール東日本大会にて奨励賞受賞。1998年「第1回長江杯国際音楽コンクール」審査員特別賞受賞。

1999年「Com Japan」にて最優秀作品賞受賞。

自由音楽工房を主宰し、各地で演奏活動の他、中国、イタリアでもソロコンサートを行っている。

福井健太  
サクソフォンリサイタル



(写真撮影：大東正巳)

KENTA FUKUI  
SAXOPHONE RECITAL



●ドビュッシー／ラプソディー

ドビュッシー (1862～1918) がこの曲に着手した1901年は、《牧神の午後への前奏曲》から歌劇《ペレアスとメリザンド》に至るドビュッシー独自の語法や様式が確立した時期でもあり、その後の10年には、管弦楽曲《海》やピアノ曲《映像》、《版画》といったイマジネーションを音で表出する名曲が次々と生み出された。この《ラプソディー》に向けられた情熱はまさにその頃と重なり、依頼者である音楽愛好団体ボストン・オーケストラ・クラブ主宰のホール夫人に1911年献呈された。元々はオーケストラとサクソフォンのために書かれた曲で、作曲者のスペインに対する憧憬や幻想に満ちている。曲は大きく2つの部分からなっており、まず楽みとおるような序奏からサクソフォンが独特の哀愁を持った主題を呈示して東洋風の情緒が満ち溢れる。第2部では音色の変化とともにハバネラ風のリズムも現れ、自由に展開して幻想的に幕を閉じる。

●イベール／アルトサクソフォンと11の楽器のための室内小協奏曲

ジャック・イベール (1890～1962) はフランスの作曲家、交響的組曲《寄港地》で人気を得た。作品はオラトリオを除く全ジャンルにわたり、印象主義と新古典主義の曲想を結びつけたとも言われている。フルート協奏曲に続いて1935年に完成されたのがこの曲で、フルート協奏曲と多くの共通点を持つが、こちらの方が規模的には小さく穏健である。しかし伸びやかで自由、奔放な魅力に溢れ、シギュール・ラシエルに献呈された。

第1楽章はソナタ形式。序奏の後すぐ軽快な第1主題がサクソフォンで奏され、直ちにたっぷりとした大らかな第2主題に移行する。この第2主題部は長く、展開部と再現部はごく短い。

第2楽章は独自の無伴奏のサクソフォンに始まり、伴奏が入って主題を形成する。繰り返しながらゆったりと推移するが、曲想が一変、華やかなロンドに入る。主題は軽快に展開し賑やかに終わる。

●デザンクロ／プレリュード、カデンツァとフィナーレ

アルフレッド・デザンクロ (1912～1971) はフランスの作曲家。作曲をブーケに師事し、1942年にローマ大賞を得ている。自己の作品を過小評価していたと伝えられ、そのために多くの作品を書きながら、現在残っている作品は少ない。この曲は56年、バリ音楽院の試験のために作曲されマルセル・ミュールに献呈されている。タイトル通り、「プレリュード」と「カデンツァ」、「フィナーレ」という3つの部分からなり、構成はシンプルである。全編緊張感に溢れた曲で、冒頭、サクソフォンの発する特徴的で不安定な音型が発展して行きながら、やがてピアノに引き継がれる。自由で憧憬に満ちたサクソフォン・ソロの後、激しいパッセージがピアノによって奏されるが、不安気な雰囲気は変わらない。躍動的なリズムとしっとりとした佇まいが交互に現れて徐々にクライマックスに向かう。

●平野義久／ユニコ エチュード

平野義久 (1971～) は和歌山県出身の作曲家。ジュリアード音楽院及びイーストマン音楽院に学び、97年に帰国。アニメなどテレビ音楽から現代音楽まで多方面で活躍中。この曲は、平野とピアニスト細田真子で組んでいるユニット「Bleu」のCD「薔薇の奇跡」収録曲で、ゲストとして参加している福井と細田デュオのために作曲された練習曲。ユニークなエチュード (練習曲) という意味だが、疾走するピアノと絡み合う特殊奏法がふんだんに盛り込まれたサクソフォン、数小節ごとに拍子に変化する複雑さ、切れ味鋭いリズム、印象的なメロディ、テクニックのみならず、演奏者の突出した感性が要求される難曲である。奏者を苦しめるために作曲された(?) という話も。

●平野義久／滲んだ雪

やはり平野＝細田のユニット「Bleu」のセカンド・アルバム「25時の音楽」に収録されている曲。クールな抒情とやるせない哀切が見事に溶け合った現代のバラードとも言える佇まいは、その美しい旋律とともに心に染み入る。ソプラノサクソフォンとピアノが静かな官能美を醸し出す。

●平野義久／ウエスト67番通りの邂逅

同じく「25時の音楽」収録曲。サクソフォンの幾何学的な音列とピアノの近代的なハーモニーは独特の世界を表出する。明確な輪郭と堅固な構成から、ポップスともクラシックともつかぬものであるが、作曲者はこれを敢えてポップスだとコメントを寄せている。奏者にとって、弾き込むごとに不思議な一体感が生み出される作品でもあるという。

●フィル・ウッズ／ソナタ

フィル・ウッズ (1931年～) は米国マサチューセッツ州生まれ、ジュリアード音楽院卒業後、67年ヨーロッパへ渡りダニエル・ユメール等とヨーロッパ・リズム・マシーンを結成、j j ジャズ・シーンにおいて圧倒的な人気を得た。《3つの即興曲》等コンサート用のオリジナル作品も幾つか作曲しており、この曲も4楽章からなる「ソナタ」ながら、全編をJAZZYなフレーズが貫いており、モロスコのために作曲された。今回はこの曲を福井自身がさらにアレンジした新しいヴァージョンが用意されている。よりエキサイティングに、より即興的に。